

百人一首の誕生

百人一首はだれがつくったの？ どうして生まれたの？ 百人一首とはどんなもの？ ここでは百人一首の基本的なことを学びます。

百人一首の歌を選んだ

「藤原定家」

藤原定家は、平安時代末期から鎌倉時代を生きた貴族で歌人。歌人として有名だった藤原俊成(俊成とも)の息子として生まれ、十歳のころから歌会に参加するなど、早くから和歌の才能を開花させた。

後鳥羽院の時代に活躍し、「新古今和歌集」「新勅撰和歌集」の歌を選ぶ役(撰者)をつとめた。晩年には、宇都宮頼綱に頼まれ「百人一首」の撰者をつとめた。



定家とも。定家は、歌の世界で敬意をこめてよばれた名前。

せいげつねん 生没年: 1162~1241年
ちち ふじわらしんげい 父: 藤原俊成
すきなこと: 和歌を詠むこと、和歌の研究や書写
しゅっけいご なまえ みやうじょう 出家後の名前: 明静
しごと さい 仕事: 39歳のとき、宮廷歌人(宮中で活躍した歌人)となる。
しゅうがい せいじょう わかよよ 生涯で4000首以上の和歌を詠んだほか、多くの歌集の撰者をつとめたり、日記『明月記』を書いたりした。

百人一首づくりを頼んだ

「宇都宮頼綱」

定家とほぼ同じ時代に活躍した歌人。鎌倉幕府に仕える御家人だった。二〇五年に出家した頼綱は京都に引越し、そこで和歌をつづいて定家と親しくなった。その後、京都の嵯峨に山荘を建てた頼綱は、ふすまに飾る歌を定家に頼んで選んでもらうことにした。それが「百人一首」のはじまり。



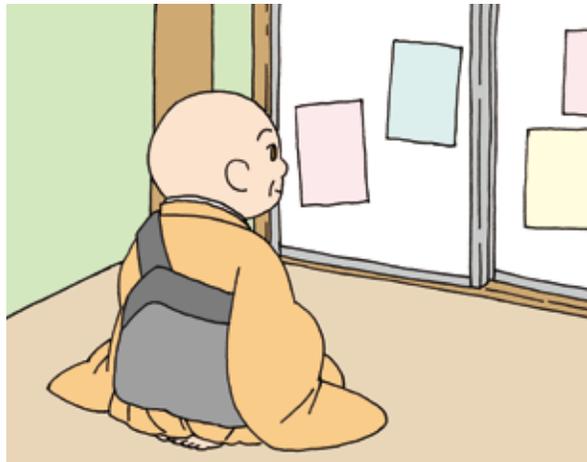
よりつな むすこ ふうぶ 頼綱の娘と定家の息子は夫婦。

せいげつねん 生没年: 1178~1259年
ちち うつのみやなりつな 父: 宇都宮業綱
すきなこと: 和歌を詠むこと
しゅっけいご なまえ れんじょう 出家後の名前: 蓮生
しごと ごけいじん 仕事: 御家人として鎌倉幕府に仕えた。28歳のとき、幕府に歯向かう計画を立てた罪に問われ、疑いがはれぬまま出家した。

「百人一首ってどんなもの？」

百人一首とは、二二二五年に定家が頼綱のために百人の歌人の和歌を、一人一首ずつ選んだもの。歌を数える単位は「首」を使う。おまじまな百人一首がつけられてくるが、「百人一首」として定家の『小倉百人一首』のことである。

歌は、平安時代につくられた勅撰和歌集『六ページ』の中から、定家が「これは」というものを百首選んでいる。今の時代風「いつと」定家が選んだ和歌へ「スー100」の「ひゃくにも」も。



定家が選んだ百人一首をのちに『小倉百人一首』とよぶようになった。

いろいろな百人一首

『小倉百人一首』の影響を受けて、たくさん百人一首がつくられた。それらをまとめて「異種百人一首」とよぶ。異種百人一首には、次のようなものがある。

- 『新百人一首』……室町幕府の第九代將軍の足利義尚が選り、一四三八年につくられた。小倉百人一首に選ばれなかった歌人の作品を選んでいる。
- 『武家百人一首』……一六〇〇年代半ばにつくられた。平経盛や源頼朝、源義経など、鎌倉・室町時代の武家の和歌を集めたもの。
- その他、女流歌人の歌だけを集めた『女百人一首』、『源氏物語』に出てくる歌だけだった『源氏百人一首』などユニークな百人一首もある。

ほぼ時代順に並んでいて、まるで歴史絵巻のようだろう。



選ばれている歌人は、天皇や上皇、貴族、役人、僧侶などさまざま。選ばれている歌は、それぞれの歌人の代表作や一番優れた歌とされている。その歌人の人生を象徴する作品が多い。歌の並び順は、おおむね歌人の年代順になっている。歌番一は六〇〇年代に活躍した天智天皇で、歌番一〇〇〇は二〇〇年代に活躍した順徳院。



作品名: 英雄百首 所蔵先: 国立国会図書館
『英雄百首』。緑亭川柳が選り、1843年に成立。素盞鳴尊から足利義尚までの英雄百人の和歌を集めたもの。しんわ じんぶつ だんき しょうかい 神話や人物の伝記を合わせて紹介してある。画像は、くろうはんがんよしつね ねんじょうしずか 九郎判官義経(源義経)と白拍子静(静御前)。

歌に詠まれた土地

古くから人々に親しまれ、多くの和歌に詠まれてきた土地や名所を歌枕(8ページ)といいます。百人一首ではどんな歌枕が出るか、地図といっしょに見てみましょう。

- 泉・瀬原(みかの原) 中納言兼輔 (27)
- 三笠山(三笠の山) 春日 阿倍仲磨 (7)
- 三笠山(三笠の山) 能因法師 (69)
- 住の江 藤原敏行朝臣 (18)
- 難波(難波潟・難波江) 伊勢 (19)
- 元良親王 (20)
- 皇嘉門院別当 (88)



- 奈良(奈良の都) 伊勢大輔 (61)
- 初瀬 源俊頼朝臣 (74)

- 天の香具山 持統天皇 (2)
- 吉野(吉野の里・みよし野) 坂上是則 (31)
- 参議雅経 (94)
- 龍田川(龍田の川) 能因法師 (69)
- 在原業平朝臣 (17)
- 高師の浜 祐子内親王家紀伊 (72)
- 猪名(あな) 大式三位 (58)

- 雄島 殷富門院大輔 (90)
- 信夫(しのぶ) 河原左大臣 (14)
- 末の松山 清原元輔 (42)
- 筑波山(筑波) 陽成院 (13)
- 男女川(みなのお) 陽成院 (13)
- 富士山(富士) 山辺赤人 (4)
- 田子の浦 山辺赤人 (4)
- 宇治山(うじの山) 喜撰法師 (8)
- 宇治川(うじの川) 権中納言定頼 (64)
- 有馬山 大式三位 (58)
- 須磨(須磨の関) 源兼昌 (78)
- 淡路島 源兼昌 (78)
- 松帆の浦 権中納言定家 (97)
- 逢坂の関・逢坂山 蝉丸 (10)
- 三条右大臣 清少納言 (62)
- 小倉山 貞信公 (26)
- 伊吹山(いぶき) 藤原実方朝臣 (51)
- 生野 小式部内侍 (60)
- 大江山 小式部内侍 (60)
- 由良 曾禰好忠 (46)
- 天の橋立 小式部内侍 (60)
- 因幡山(いなほの山) 中納言行平 (16)
- 高砂 藤原興風 (34)
- 権中納言匡房 (73)

かるた遊び ① 競技かるた

3人以上で遊ぶ
札の暗記が必要

競技かるたは、一対一で五十枚のかるたを取り合う競技。ピンとはりつめた空気の中、真剣勝負でおこなわれます。対戦相手とのかけ引きや反射神経、体力が必要なため、「スポーツ」「畳の上の格闘技」ともいわれます。毎年、全国各地で大会がおこなわれています。

「遊び方」

① 取り札をませる

百枚の取り札を全部裏返して、かき混ぜる。各自が二十五枚ずつ取り、持ち札(自分の札)とする。残り五十枚は使わない。



② 取り札を並べて覚える

持ち札を表向きに下の図のようにならべ、どの札をどこに置くかは自由。自分が取りやすい、相手が取りにくいように置くのがポイント。このときに、自分が並べるほうを「自陣」、相手が並べるほうを「敵陣」という。全部並べたら、十五分間の暗記時間で、自分の札と相手の札を覚える。札は競技のときずっと並べかえることができない。その場合、相手に伝え、読み手にも次へ進まないうちに手をあげて知らせる。

③ 読み手が札を読む

姿勢を正して座り、頭を下げて札をしっかりと見ます。「あいさつする。読み手がスタートの合図となる序歌を読みあげる。序歌は百人一首にない和歌で、下の句を二回読み、一枚目の札を読む。全日本かるた協会では序歌を『古今和歌集』の仮名序に書かれた王仁の歌と指定している。場に出ていない五十枚(空札)が読まれることもある。

難波津に咲くやこの花
今を春へと咲くやこの花



二枚目からは、一つ前に読んだ歌の下の句を読んでから上の句を読みあげる。これは、選手が次の札に集中できるようにするため。

④ 札を取る

読まれた札がわかったら、すぐに札を取る。早くわかったほうが、早くはじき出す。33ページで競技線からはじき出したほうが札を取る。自陣の札を取る。持ち札が一枚入る。敵陣の札を取った場合は、自陣の札から自由に一枚を選んでも、相手にわたす。「わを」札を送る。

⑤ 勝ち負け

先に自陣の札がなくなったほうが勝ち。勝負がついたら、「ありがと」をいって終了。

ルール

取り手

札を取るのどちらか片方の手のみ。競技では、**右手なら右手、決め**たほうの手だけを使う。両手を使ったり、反対の手を使ったりすると、**反則になり、相手が取ったこと**になる。上の句が読まれるまで、**両手は床につけておく**。

お手つき

読まれた札がある陣地と逆の陣地の札にふれることが**お手つき**になる。お手つきをすると、**相手から札が一枚送られる**。読まれた札以外にある陣地なら、**読まれた札以外**の札になっても**お手つき**にならない。

札の取り

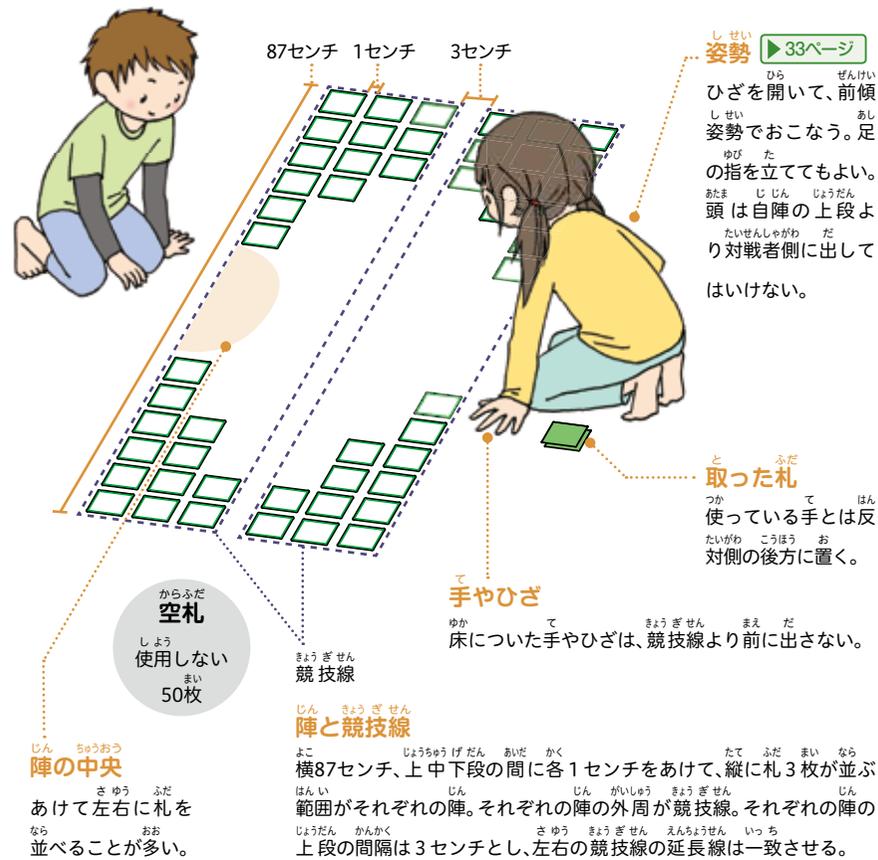
先に読まれた札をさわったほう、もしくは競技線からはじき出したほうが札を取る。同時に札にさわったとき(セーム)には、**読まれた札が自陣にあったほう**の取りとなる。

カラダブ

空札が読まれたときに、**自陣と敵陣両方の札にふれてしまった場合**、相手から**札が二枚送られる**。



カラダブになると一気に4枚の差がつく。



春 はる

夏 なつ

秋 あき

冬 ふゆ

恋 こい

旅 たび

別 わかれ

雑 そう

ちはやぶる

神代も聞かず

龍田川

〔がは〕

から紅に 水くぐるとは

〔くれなゐ〕

〔みづ〕

〔みづ〕

〔く〕

③

ち は

決まり字

▼26ページ

出典

古今和歌集 294番

この歌の内容

神々の時代にも、こんな光景は聞いたことがない。龍田川の一面に紅葉がちつて、真っ赤な絞り染めの布のようになるとは。

この歌の場面は……

かつての恋人である「糸后(高子)から」屏風を彩る歌を「と求められ、屏風にえがかれた龍田川の紅葉」▼21ページの絵を見て詠んだ歌。作者が昔の恋を思い出して、熱い気持ちを詠んだといわれている。龍田川は歌枕▼8・22ページで、奈良の紅葉の名所。最後の句をくくるとすると、「水面がまっ赤な絞り染めの布のようだ」となる。「くく」とすると、「川面にびっしり紅葉がちつた下を水がくくって流れる」となる。

用語解説

*ちはやぶる……「神」字治にかかる枕詞▼9ページ。

*神代……神々がいた昔。数々の不思議なことが起こった時代。

*から紅……濃くて深い赤色。



平安時代きつての色男
在原業平朝臣 (825~880年)



関連人物

兄 中納言行平
▼55ページ

親戚 大江千里
▼62ページ

マンガで読む!

